

## 八 馬蹄石

アヤメ石が讃岐の和泉砂岩のある溪谷から見つかっているように、馬蹄石も和泉砂岩中に包含される頁岩中ケツガンから出てくる。

「綜合郷土研究」に与田山の鹽谷（アヤメ石を出す）の和泉砂岩層中にカキの化石がある。それが馬蹄に似ているので馬蹄石という……とある。して見るとこの馬蹄石は、カキの化石ということになって、馬蹄ガキといわれている。

「讃岐名勝図絵」に、屋島の名産、壇之浦の北部に多くあり、石面が馬蹄の形の印するおで馬蹄石として世の翫賞になっている……とあるが、この屋島の名産馬蹄石……それはまだ見ていない。

屋島の北海岸には岩片の縁フチに沿って溝を生ずる「縁とり石」という一種の奇石がある。それを指しているのかも知れない。ここでい馬蹄石は、先年、石ブームの頃、一般に賞翫されるようになったもので、細末の粘土質の頁岩で、磨けば艶

が出る、美しい石肌になるものである。

この頁岩は灰色や薄褐色からの黒色の部分が皮を被ったような層序となった色彩の異なつた部分があり、飾石として賞美されている。

土器川の上流、琴南町、美合の駒ヶ渚そこの和泉砂岩中に包含されて駒の足形のような馬蹄石が並列している。駒ヶ渚という名もそれから来ているらしい。

讃岐廻遊記に、萩川（土器川の上流）の名石として、「四条村、金比羅街道なり、馬莖石とて名石あり、近年拾い尽して稀なり、その外名石多し……」とある。

ここでは馬莖石と書いて名石としているがこれは勿論馬蹄石のことである。馬莖とは馬の陽物のことである。

讃岐廻遊記は進藤蘭石斎の著である。蘭石斎は馬蹄石といわずに馬莖石と名づけている。それで思い出されるのは、讃岐の陰陽石のことである。

雲根志の著者近江の山田石亭（木内小繫）は、「陰陽石の産地は駿河、讃岐、近江、大和の諸国で、讃岐では、北方で陰を拾うと南方で陽石が得られる……」

と述べ、馬蹄石も陰陽石の一種といっている。

廻遊記の蘭石斎が、土器川の上流から産する馬蹄石……それを陽石として、馬莖石と名づけたものであろう。

今日、その形も面白く、讃岐では唯一の磨く飾石となつているこの馬蹄石は、陰陽の形を思わすものも少くない。それで早くからこれを讃岐の陰陽石として知られていたのである。

蘭石斎は、その名が示すように愛石家である。家は土器の大政所（大庄屋）で、その先祖は京都、近衛家の長臣、進藤伊勢守の次男主殿頭と申す人である。

応永年間に讃岐に移つたというから、地方の旧家……名家で、古今の書籍は勿論、珍宝も少くはなかった。その庭園は、若州の隠士宗味斎の作った由緒のもの、龍枝館と名づけていたが、この家には実龍の右の腕骨が、古くから伝わっていたという。

「実龍の腕骨」とは、おそらく今日のナウマン象か、ステゴドン象の化石であ

ろう。

その龍骨の名と、庭の古木をとって龍枝館と名づけていたぐらいだから、奇石もあつたに違いない。

高松八代の藩主松平讃岐守頼儀公の巡国の際、所蔵の飯野山産の水晶を献上した程の蘭石齋である。

讃岐では北で陰石、南方に陽石……という、石亭の雲根志……その知識もあつたので、萩川（四条辺の土器川）の馬蹄石、それを馬莖石と称したものであろう。

ともかく、馬蹄石は、馬莖石でもあり、陰陽石と考えられていた。

また、その頃讃岐の学者、全讃史の著者……中山城山は、自分の郷土にちかい香東川の上流吉光川で、偶然馬蹄石を拾ったが、それが、建物の形、そのものに似ているので、早速陰石記というものを書いた。

「随筆さぬき」……小田徳三著に原文を載せている。漢文で、石に添えた短文である。

「吉光川で、たまたま陰石を拾った。形や色合がまったく女陰のように見える。天が物を生ずるといふが、こんな石までに人体を与えているのは如何にも奇異である。」

奇体な姿なので、棄て去つてもよいようなものの、さらばといつて、棄て去るのは、いわば天功をわきまえぬということにもなる。それ故、自分は敢てこの石を大切に保存して、宝物とする」

という意味が書いてあつて、そんな理屈をつけ、城山先生：この石を大切に保存したという。

また、草薙氏の「讃岐風土記」には、幕末の志士、日柳燕石が畝川で拾った陰石を、三木青山のために、「和合石の記」を作つたと書いてあるが、これも陰陽石で、畝川辺の馬蹄石のことである。

前記、「讃岐の随筆」に、

「馬蹄石は近頃まで香川郡下笠居村、生島の海浜にあつたといふが、今日では殆

んど見られない。然し、大越村木沢では今、猶、沢山あつて容易に拾得出来ると  
いう」

と、記しているが、これは屋島の馬蹄石というものと同様、もし、そういう物が  
出てもこれらは、火成岩類の石質のもので、今日、磨いて、しつとりとした艶の  
出る、ここでいういわゆる馬蹄石ではない筈だ。

最近、飾石にされる讃岐の馬蹄石は、和泉砂岩層に介在する頁岩（粘土質の堆  
積岩）中ことに硅質頁岩である那智黒（基石）に近い、黒と灰、茶褐色の交った  
馬蹄石状のもので、和泉砂岩中に結核状に捕獲された形で露出している。

土器川の上流、天川神社の南方、川岸の岩頭で私は、この露出状態を見たこと  
がある。川原から発見されるものは、勿論それが流れて礫片になったものである。